

山梨県東部・相模川流域の土砂災害と「びやく」の地名との関連

井上公夫*(砂防フロンティア整備推進機構)・相原延光*(関東学院中学校高等学校・地学部コーチ)

§1. はじめに

筆者らは南関東地域の土砂災害と「びやく」の地名との関連を調査している。図1は「びやく」事例の分布図で、関東大震災(1923)による土砂災害分布範囲とほぼ同じである。「びやく」については、第32回歴史地震研究会(2016)でも紹介したが、山梨県東部・相模川流域で新たに「びやく」関連の地名と明治期の土砂災害との関連があきらかになったので紹介する。

いさぼうネット「歴史的な大規模土砂災害地点を歩く」は2015年4月より連載を開始し、「コラム42」でも山梨県内の「びやく」事例を紹介したが、「コラム61」で山梨県東部相模川流域の土砂災害を説明している。

§2. 明治40年(1907)の山梨県内の土砂災害

山梨県内は明治40年(1907)、明治43年(1910)に激甚な土砂災害を受けた。特に、明治40年災害は最も被害が大きく、山梨県全体で死者233人(全国の死者436人)、家屋全壊1,267戸、流失4,500戸もの激甚な被害を受けた。図2は、早川・須田(1911)の『山梨縣水害誌』の口絵「明治四十年八月下旬山梨縣水害略図」である。

§3. 相模川上流・桂川流域の「霹」

明治40年(1907)災害については、大月市郷土資料館で写真展示が行われている。それらの中で「霹」に関する事例の1例を紹介する。

奥脇愛五郎(1907)によれば、「明治40年8月22日より雨、頻りに降りて、一時も雨止まず。23日に至れば益々雨甚だしく旧盆に相当するも、墓地へ火を燃しに行く者なし。笹子川出水迫分、阿弥陀海、橋爪、立川原等家屋の流失するもの、頻々続々亦、上野原は唐沢山崩れて霹(山津波のこと)を為し、近隣の者、笹子川の出水を恐れて避難したる祖師堂は押し潰され、上野原大屋吉造氏の母同所小林浅右エ門氏子供2名、其他数名の即死者を出したり。…而して栄八横の鉄橋を渡りたる時、亦第3の霹は来れり。斯らくして7,8回の霹は飛び来れり。然るに我が家は5,6回目迄は只泥土に押し込まれたるのみにして、家は建ち居りしが、最後の大霹の為に土蔵も何もかも押し流されたり。…而して恰度十二時頃に至り、上野原は唐沢第3回の霹の為に、全滅せられたり。我等最早震へ居る際とて此の上野原の霹声の為此の社原迄影響を及ぼさざる。」などと記載されている。



図1 関東地震による林野被害区域「山崩れ地帯」概況図と関東地震による土砂災害地点図(●地震直撃, ■地震後降雨による土砂災害)(井上, 2013)の図に▲びやくの地点を追記



図2 明治四十年八月下旬 山梨縣水害略図(早川・須田, 1911)

§4. むすび

「びやく」という用語は、現在はほとんど使われていないが、明治・昭和の頃まで南関東では広く使われていた。地名や災害記録を丹念に調査してみると、小字名などに多く残されている。千葉県房総地区では、滝沢馬琴著『南総里見八犬伝』に、「人びやく打ち」の表現があり、さらに調査を進めていきたい。